

大島 登志彦 教授

【おおしま としひこ】

1954年群馬県生まれ。工学部や教育学部・教育学研究科に在学して学んだ後、高等学校、高等専門学校での勤務を経て、1999年から本学経済学部勤務。



- 交通論Ⅰ
- 世界地誌
- 日本地誌

公共交通に、ロマンを感じつつ……

経済学部の授業では、日本地誌と世界地誌、交通論Ⅰ・Ⅱ、そして大学院では、交通論の講座を担当しています。専門分野は、交通地理学、歴史地理学、産業考古学で、具体的には、地方の鉄道や路線バスを主体とする公共交通と地域の関わり、地域の産業史とその遺産などを題材とし、歴史を重視して地域を学ぶ視点で研究を進めています。

地域住民の足となる公共交通は、有識先人達が、明治期から昭和初期にかけて、苦勞を重ね、私財も投じながら開業にこぎつけた路線が多いなかで、地方都市や中山間地域では、戦後の高度経済成長期以降のモータリゼーションの影響などによって、利用者は減少し、一部は廃止されたり、現在存廃の危機にあります。しかしその一方で、高崎市内の循環バス「ぐるりん」にみられるように、多くの自治体がコミュニティバスを運行し始めるなど、公共交通の重要性と活性化が叫ばれています。

群馬県における産業経済の発達のもなった製糸工業を初めとする近代初期の鉱工業は、衰退したり老朽化して取り壊された施設も多いなかで、群馬県が富岡製糸場の世界遺産登録を目指すなど、地域の産業遺産の社会的価値が認知されるようになりました。そうした近代産業の盛衰を把握することは、経済・経営学を学ぶ上でも、貴重な指針になっていくと思います。

私の研究及び授業・ゼミナルでは、このように日本が貧しかった時代に構築されてきた公共交通や産業遺産にロマンを感じながら、先人の苦勞の軌跡や時代的背景などを学びとって、それが現在に存在する意義を認識することから展開される調査・研究を、目指しております。

ゼミ生のひとこと



大島ゼミでは地域交通の盛衰と沿線地域の関連性などについて、実際に現地へ赴いて勉強する臨地研究を行なっています。学生にとって非常に難しい問題に対しても、先生から熱意あるご指導を頂き、実際に机の上だけでは分からない、五感を使って「現実」を学ぶことができました。

大島ゼミ (2011年3月卒業) 高橋 智恵